

教員の世界へようこそ！ ～初めて教職に就かれる皆さんへ～

おき た のりつぐ
沖田 悟傳

1. はじめに

教員として初めて教壇に立ったときの光景は、今でも私の心の中に強く残っています。期待と不安が入り混じる中で向き合った子供たちのまなざしは、私がこれから担う責任の重さを静かに伝えていました。改めて教員の魅力を考えると、大きく4つあります。1つ目は子供たちの成長を見守ることができること、2つ目は感動を共有できること、3つ目は専門分野を活かせること、そして4つ目は自分自身の成長につながることです。本稿を通して、初めて教職に就かれる皆さんに、教員としての心構えや授業づくりのヒントをお伝えできればと思います。

2. 新採教員に求められる基本的な心構え

(1) 「学び続ける教員」であるという自覚

教員という仕事は、採用された時点で完成するものではなく、日々の実践を通して磨かれていく専門職です。したがって、知識や指導技術が十分身に付いていないことに対して、必要以上に落ち込んだり悩んだりするのではなく、「自分は今、学びの途中にいる」という認識を持つことが重要です。授業や指導がうまくいかなかったときこそ、自身の成長のチャンスと捉えましょう。

(2) 素直さと謙虚さを大切にする姿勢

新採教員にとって、先輩教員からの助言や指摘は貴重な学びの機会です。自身のやり方や考えに固執することなく、周りの先生方の意見に真摯に耳を傾け、受け止める素直さが求められます。また、困ったことやトラブルに対して、一人で抱え込み解決しようとするのではなく、周囲の先生方と連携し、「チーム学校」として対応しましょう。課題を感じた段階で素直かつ謙虚に相談することは、子供を守るためにも必要な行動です。

(3) 児童生徒理解を最優先にする視点

教員の仕事の中心には、常に子供たちが存在しているということを、決して忘れてはなりません。日々の学校生活では、授業の進度や指導方法に意識が向きがちですが、真に重要なことは、子供一人一人を大切に、目の前の子供を理解しようとする姿勢と、常に子供にとって何が最善であるかを考えることです。子供一人一人の背景や思いに丁寧に目を向け、日頃のやりとりや見守りを通して信頼関係を築いていくことが、安定した指導につながります。

3. 学級経営で心がけること

(1) 「居場所づくり」と「絆づくり」

学級経営において最も大切なことは、子供一人一人が安心して毎日を過ごせる環境を整えることです。そのためには、「居場所づくり」と「絆づくり」が不可欠です。「居場所づくり」とは、子供が学級の中で受け入れられていると実感し、落ち着いた環境の中で心理的な安心感を持つことです。教員が日常的に温かな声かけや肯定的な関わりを行うことで、子供は自分自身を大切に感じ、学級の一員として主体的に関わろうとする意識が育ちます。一方、「絆づくり」とは、学級内に相互の尊重と信頼を基盤とした人間関係を築くことです。日常的な関わりや学級活動を通して他者への理解を深めることは、互いの良さを認め合い、高め合う学級づくりにつながります。

(2) 信頼関係の構築

子供と教員との信頼関係は、学級経営の根幹です。信頼関係が構築されていない学級では、生徒指導や学習指導が円滑に進みません。教員は、日常的なあいさつや声かけを通して、子供一人一人の存在を尊重する姿勢を示すことが大切です。子供の名前を正しく呼ぶことや、努力や成長を具体的に評価することは、子供の自己肯定感を高め、教員への信頼感を高めます。また、指導の場面では感情的にならず、「どの行動にどんな問題があるのか」を根拠とともに分かりやすく伝えることが大切です。人格を否定せず行動に焦点を当てた指導を行うことが、子供の納得感を高め良好な関係づくりにつながります。

(3) 一貫性と公平性のある指導

学級運営においては、指導の一貫性と公平性が不可欠です。教員の対応にばらつきがあったり、判断基準があいまいであったりすると、子供は不公平感を抱き、規範意識の低下を招きます。学級のルールや生徒指導の方針は、年度当初に明確に示し、守れなかった場合には誰に対しても同じ基準で対応する姿勢が求められます。一方で、子供の背景や状況に配慮する柔軟さも同時に必要です。形式的な平等ではなく、児童生徒理解に基づいた「公正な対応」を心がけることが、学級の安定につながります。

(4) 小さな変化を見逃さない姿勢

多くの子供が同じ教室で毎日過ごしていれば、多少のトラブルや行き違いが起こるのはごく自然なことです。問題行動が起きてから対応するのではなく、日常の小さな変化に気づくことが重要です。表情が暗い、発言が減った、友人関係に変化が見られるなどのサインは、支援の必要性を示している場合があります。学級担任として、このようなサインを見逃さない「鋭い感性」を身に付けることが求められます。日々の観察と声かけを積み重ねることで自身の感性を高め、子供や学級の様子に気になることがあった場合には、早い段階で関わることで問題の早期解決につなげましょう。

4. 教科指導で心がけること

(1) 目指す授業の明確化

学校生活の大半は授業です。教員は、教えるプロとして「授業で勝負」という意識を持つことが大切です。良い授業とは、子供たちが主体的に参加し、意欲的に学び、目標とする力が着実に身に付く授業です。授業の主役は、何と言っても子供です。その主役の子供たちが、熱心に参加し意欲的に学んでいることが重要です。そして、1時間の授業ごとに「このような力を身に付けさせたい」という目標を明確にし、その目標が達成されることが求められます。「今日の授業は楽しかった」だけで終わらない授業を目指しましょう。

(2) 「良い授業」は「良い準備」から

良い授業は偶然に生まれるものではなく、事前の丁寧な準備によって支えられています。この丁寧な準備こそが、教材研究です。教材研究を通して学習内容を深く理解し、子供の実態やつまずきを想定することで、適切な発問や支援が可能になります。また、授業のねらいや流れを事前に整理しておくことで、見通しを持って学びに向かわせることができます。質の高い良い準備は、授業の質そのものを高める土台となります。

(3) 主体的・対話的で深い学びの実現

現在求められている授業の姿は、「主体的・対話的で深い学び」の実現です。子供が学習内容を自分事として捉え、自ら考え、学び続けようとする姿勢を育てることが重要です。そのためには、導入の工夫や見通しをもたせる課題設定、思考を促す発問が欠かせません。自分の考えを持った上で友達と対話を重ねることで、多様な考えに触れ、学びを深めることができます。教員の役割は、子供の気づきや発言を丁寧につなぎ、学びを広げ、高める支援（サポート）を行うことであり、このような手立てを通して深い学びの実現を目指します。

(4) 教科指導における子供理解と信頼関係の構築

教科指導を通して信頼関係を築いていくためには、子供一人一人の理解の程度や、思いに寄り添う姿勢が大切です。授業の中で、分かった喜びやできるようになった達成感子供と一緒に感じたり、努力している姿を言葉で認めたりすることで、子供は安心して学びに向かうことができます。うまくいかない場面でも否定せず、共に考える姿勢を示すことが、教員への信頼につながります。子供とともに授業を創り上げていく日々の積み重ねが、子供との穏やかで確かな信頼関係の構築につながります。

(5) 授業改善につなげる効果的な振り返りの重要性

授業後の振り返りは、授業の質を高めていくうえで欠かせません。授業後に、子供の反応や発言、学習の様子を丁寧に振り返ることで、指導の成果がより明確になります。また、振り返りを次の授業に活かすことで、より子供の実態に即した指導が可能となります。こうした振り返りを日常的に行うことで、無理のない授業改善につながり、よりよい学びを生み出します。その積み重ねが、教師の指導力向上と学級全体の学びの充実につながります。

5. 保護者対応で心がけること

(1) 保護者対応がうまくいかない要因

近年、学校現場において、保護者対応は大きな課題の一つになっています。保護者対応がうまくいかない要因として、① 保護者の訴えに対して心情理解や謝意を表することができない、② 保護者の話を最後まで聞かず言い訳をしてしまう、③ どんな訴えなのか事実の確認ができない、などの共通点があります。考え方の前提として、「保護者からの訴えは、処理するものではなく対応するものである」という意識を持つことが大切です。

(2) 初期対応の重要性

保護者からの訴えに対応する際には、最初の関わり方がその後の関係を大きく左右します。初期対応においては、相手の思いを真摯に受け止める「誠実な対応」が求められます。まずは、相手の話をさえぎらずに「話を聞く」姿勢を大切にし、不安や不満の背景を理解することが重要です。その際、自己防衛的に事情を説明したり、感情的に反応したりするのではなく、「言い訳をしない」姿勢で向き合うことが大切です。落ち着いて一つ一つ丁寧に初期対応を行うことで、保護者の安心感につながり、信頼を得ながらともに解決に向かうことができます。

(3) 保護者対応のポイント

保護者対応の「さ」、「し」、「す」、「せ」、「そ」を身に付けましょう。

保護者対応においては、「さ：最初が肝心」であり、初期対応の姿勢がその後の展開を左右します。まずは相手の思いを受け止め、「し：しっかり聞く」ことを大切にするすることで、不安や不満の背景を理解することができます。その上で、問題を長引かせないために「す：素早い対応」を心がけることが重要です。また、やり取りの内容や経過を整理するために「せ：正確な記録」を残し、情報を共有できるようにする必要があります。さらに、個人で抱え込まず、「そ：組織で対応」することで、一貫性のある適切な対応が可能となります。

6. むすび

日々の教育活動の中で経験する様々な出来事は、初任者としての成長を支える大切な学びとなります。思いどおりにいかない場面に出会うこともありますが、そうした経験の一つ一つが実践力を育てていきます。周囲の教職員と相談し、助言を受けながら、子供一人一人に寄り添う教育を大切にしてください。皆さんの今後の成長と活躍を、心より願っています。

(元 同志社大学 教授)